
銀河の歴史は何ページだったっけ？（仮）

ぼてと

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河の歴史は何ページだったっけ？（仮）

【著者名】

ZZード

【作者名】

ぽてと

【あらすじ】

一般的の成人女性が、銀河英雄伝説の登場人物に転生するお話です。一応戦争ありの原作なので、保険で残酷描写ありにしちゃいます。

愚図でノロマな亀更新です。あしからず。

* この小説は、『らいとすたつふ2004ルール』に基づいて作成しています。

私、シャルロット・フイリス・キャゼルヌ。

…いや、マジで。

コスプレとか、『』遊びとかじゃないよ、マジでだよ？

アレックス・キャゼルヌの長女で、父親から7歳年上のココアン・ミンツの事を

「お前の未来の旦那だぞ～」
と刷り込まれるいたいけな少女がこの私、シャルロット・フイリス・キャゼルヌですよ。

私も自分が精神的におかしくなりすぎたんじゃないとか、質のよすぎる夢を見てるんじゃないかと思つて色々と試してみたんだけど、どうやら夢じゃないらしい。

シャルロットになつて1週間、寝て起きても日本の自宅に戻れるわけでもなく、転んだり頭を強く打ち付けたり（怒られた。オルタンスさんとキャゼルヌ先輩にめつちや怒られた。）しての衝撃で目が覚めるわけでもなく、どうやらドジでシャルロット・フイリス・キャゼルヌになつてしまつたらしい。

そろそろ現実を受け入れなきゃと思い始めました。

日本では両親兄妹健在で、家族仲もぐく普通の、ホントに一般的な家庭で育ってきた。

確かに、寂しいし、会いたいし、だからこそこの1週間いろんな方法を試して帰ろうと努力してきたのですが。

もう成人で働いてたからねえ、私。

ひとり暮らしも始めてたから、実際は毎日家族に会つてたわけでもないし、毎日電話で生存確認していたわけでもないし、要するに血のつながった家族といえどそれほど密に繋がっていたわけでもなかつたのだ、近頃は。

ちょっと連絡もなかなかできない海外の僻地に仕事で飛ばされて会える事が出来なくなつたと想いこめばこの孤独感にも耐えるかもしれない、よしそうじょう。そう在うつ。

日本のお父さん、お母さん、先立つ不孝をお許しください。
あなたたちの娘は星になりました、いやマジで。

だって『シャルローン』だし。

シャルロット、いま8歳。パパのお仕事の関係でイゼルローンで暮らしています。

「シャルロット……ちょっと手伝つてあげたい」

「はあ～こ、ママー」

うん、子供返りするのも悪くないかな。

パパとママに想いつきつときつて、可愛いシャルロットになつきつてやるんだからーー！

「お兄ちやま、がんばってね」
「うん、シャルロット、行つてきます」

コリアンお兄ちやまが走つて艦橋に向かつていぐ。

私はそれを、二口二口と手を振つて見送るのが今一番重要なお仕事だ。

まあもちろん、勉強するとかママのお手伝いするとか、他にも大切な事はあるんだけど、やっぱり自分の命を守つてくれてる人たちに感謝するのって重要な事だと思つの。

やー、それにしても。

私、コリアンお兄ちやまとカカリソお姉ちやまとか、軍人に転生しなくてマジ助かつたわ。

とりあえず戦わなくていいもんね。よくある転生ものの小説のように、『頭の中で自分が知る筈のない記憶が甦つてきた』的な事も、『考える前に体が動く』なんて経験も、チートな能力も今のところない。

シャルロットは8歳だから、それなりにできない事もなんとなく許されるけど、軍人スキルなんて全くなかつた私が、他の人に転生しちゃつたらすぐ死んじゃうと思うのよね。モブの軍人だったら自分で済むけど、ヤンおじちやまとかに転生しちゃつてたら何千人かと心中することになつてどれだけ恨まれるかわからない。

今私の、俗に言つ記憶喪失者です…今のところ大っぴらに忘れてないんだけど。
別に私が上手く立ちまわれたとかいうわけじゃなくて、8歳という

『 小さな「コドモ』であるという周囲の認識と、転居続々の『家庭の事情』が田へらしまになっただけ。

小さこ子こにいぢこひ「アレなんだつけー?」とか「コレビリしたつ
けー?」とか記憶の確認なんてしないじやんね?
だから意外とどづにかなつてゐる。

子供つて飽きつぽくて、好物とか、ハマつてゐ事とかも結構頻繁に入れ替わつたりする事もあるじやない?だからシャルロットの好きなものの傾向なんて全然わからないけど、「今の興味はちょっと前と違うのかも」程度に捉えられてるっぽい。

あと、多分シャルロットつてハイネセン どづかの僻地な惑星 イゼルローン この時8歳なはずで、この世代の子供が触つていい物も限られてて、どちらかといふと今から覚えてくことが多い世代つていうのにかなり助けられてるんだよね。

まだイゼルローンに来て間もなかつたからか、家電操作を覚えてなくとも「まだ覚えてないのね」とか親切に教えてくれちゃつたりする。

「ママー、何か変なとこ触つちやつたみたいなの」とかなんとか言つちやつて、現在積極的に覚えている最中です。

交友関係的には、ママとパパが覚えてるくらい仲のいい友達ができてなかつたつてのがラッキーだつた。
もし仲のいい友達がいたら申し訳ないけど、交友関係は今から作つていこう、そうしよう。

今はアルバムを見て、たまに不審がられない程度に
「ママー、この子誰だつけー?」
と聞いて知識を得たり、

ハイネセンとかどづかの僻地から友達だつたと思われる子たちが送

つてくれるビデオレターチックなモノを見たりして記憶の確認をしたりします。

ま、一応は〇▽△で見る外見からの想像で、『ちょっと少女趣味でちょっとお転婆、何故何ぼつやなお年頃』（ナニソレ）設定を作つて猫かぶつてはいるんだけど、ストレスにならない程度ですんでるし。

とはいっても一度はちょっと危なかつたりもした。

前にみんなでTV見てる時、ママが
「シャルロット、ほらそろそろ時間じゃない？ あなたの好きなあの番組に変えなさいな」

とか言いだしちゃつて。パパも

「ああ、シャルロットはあの番組が好きだからなあ。今日は何が出来るんだろうつな？」

とか、日本のチャンネル権渡さないオヤジどもに見せてやりたいマイホームパパ的な事を言い出したんだけど。

（好きだった番組って何……？）

欠片も想像できない私は大慌てでさ。

アニメなのか、ドラマなのか、全く想像がつかない。
そもそも〇▽△とか小説でもシャルロットがTVを見ている場面なんてなかつた気がする。

ヤバイ、TV番組ごときで記憶喪失がばれるのか……？
でも。

「私たち、かえたげるー」

と、妹が一言言つてくれたおかげで助かつた。

「…あ、ああっ、チャンネルかえてくれるの？ありがとう…」
と、慌てて妹にチャンネルを渡す私。

「あら、偉いわねえ。お姉ちゃんのお手伝い？」
「偉いなあ、どれ、ちゃんとできるかな」

と、パパに手伝つてもらつてチャンネルを変えている妹は、どこか
誇らしげだ。

「できた～」

「ありがとう……とつても嬉しい…！」

妹が変えた私の好きな番組は、戦記物のアニメだった…どんな趣味
だよシャルロット…。

ちなみに。

「妹」と言い続いている妹は、小説の時も最後まで名前と年齢が出てこなかつた可哀想な子なんだけど、私がシャルロットになつてから数週間、

今まで一度も名前と年齢の話になつた事がありません…！

ビックリするー。

てか、本当に設定に忠実な世界なんだなあと思つた瞬間でした…。

パパとママは苦も無く名前も年齢も言わないで過ぎてるけど、私はちょっと厳しいのよね。

一緒に遊んでる時とか絶対に名前を言わないのでどんな無茶振りかと想ひ。

そのうち、出でくるのかなあ…名前。

とりあえず墓穴掘りたくないので今は名前を呼ばない努力を惜しんでないけど、いずれあだ名でもつけちゃおう。

なんて、色々あるけど、やっぱり転生先がシャルロットで良かったなあ、としみじみ思う一番の理由は。

シャルロットには、死亡フラグがないの…！

ここ重要。

とりあえず限りなくモブに近い脇キャラだったためか、どんな行動をとるとか細かい行動は殆ど書かれてない氣もするけど、要するにママにべつついとけばほほバッドエンドにはならない、のは魅力的。

私の銀河英雄伝説の知識つて、OVA>小説で、大筋の流れは覚えてるけど戦況とかの細かい流れが言えるほどマニアチックな読み方なんとしてないし、軍人の誰かとになつたりなんかしちゃったら、話の流れは最悪な方向に流れしていくに違いないと思つんだよねえ。

まあ、それってせっかく転生したんだから、死んじゃう予定の人を助けようとか、そういう大それた『ファンとしての夢の世界』を行に移すのも難しい位置にいるキャラだつて事なんだけど…そこらへん、難しいわね。

コリアンお兄ちやまの年齢から逆算していくと、多分物語として書かれている最期らへんって私まだ12歳くらい……？

マジで何の権利もないガキじゃん。

え、私にどうしちゃって言ひの？

転生した意味、ある？？

「ドコアンお兄ちゃん、あっちで遊びましょ」
「いいちきって~」

ヤンおじちやま達がタジ飯を食べにくる日は、ココアンお兄ちやまと眠くなるまで遊んでいい事になつてゐる。

てか、週2で来るって多すぎない?下手したら週3の時もあるんで
すけど。

でもそれはパパにも後ろめたい所があるからみたいなんだよね。

そもそもナンチャラ法（既に名前を覚えてない）でコリアンお兄ちゃんがヤンおじちゃんに引き取られたのだって本当の事を言えばおかしいのだ。

普通は子供のできない夫婦か、子供が独立した夫婦に引き取られるもの、らしいから。

でもパパが、一俺だつて色々考えて」ニアランお兄ちゃんをヤンおじちゃんの所に預ける事にしちゃつた。

ヤンおじちゃん達の衣食住が破綻するのはハハにとっては寝覚めが悪いらしい。

七八

「あなたが蒔いた種なんだから、最期まで自分で責任を持たなくてはね」

と、いつものようにハハをせり込めつつも、せりせりアンお兄ちゃんに色んな家事を教え込んでいる。

週2で家に来るのは別に夕飯たかるだけじゃなくて、料理やお掃除

をママに教わりに来てるつてのもあるんだよね。

で、お礼に私達の子守りをする、と。

じゃあ遠慮なく相手をしてもらおうじゃないの。

……ついつてもちゅうとインドア派に見えるシャルロットと、絶対に付いてくる妹がいれば、遊びなんてたかが知れてるんだけど……。因みに今日は『お絵かき』です。

「シャルロット達は、何を書いてるの?」

「えっと、パパと、ママと、わたしと、妹と、コリアンお兄ちゃんまー!」

「わたくし、げんすいー」

妹が言つ、「げんすい」とはヤンおじちゃん達の飼つているテブ猫のこと。今は暖炉の前にこもるけど、名前を呼ばれたので尻尾と耳だけ少し動かした。

……あまりにも動かないから太ったに違ひない。

「…………なんでそこには私はいないんだ?」

「シャルロットが描いたのが『家族』だからだらう。コリアンはずれ、シャルロットの夫になるわけだからな、立派な『家族』だ」「私はコリアンの保護者ですよ、コリアンが家族なら私も立派に『家族』じゃないですか」

「8歳時にはそこまでわからんだら?」

「…………」

ヤンおじちゃんまとパパは不毛な会話をしているけど、

もちろん私も狙って描いてます。

「…………僕は何を書こうかな…………」

今さらヤンおじちゃんは描けないらしい。……ま、余計な気遣いは逆に悲しくなるだけだよね。わかります。

と、横から妹が

「あのねー、おひめさまがいい！…！」

とおねだりしてきた。

「ゴリアンお兄ちゃん、お姫さま描いて？私も書いてみる。……ね、みんなで描こう？」

ママも、妹も、と二人にもクレヨンを渡すと、妹は「おひめさまー」と嬉しそうにグリグリと描きだし、ママは「お姫様は女の子の憧れですものね」と言いつつ描き始めてくれた。

ふふふ、ココで2人の『お姫様』像を確認してこの世界の『お姫様』像をリサーチしてやるわ。

「じゃあ僕もお姫様描いてみようかな…」

ゴリアンお兄ちゃんも描きだしたので、私も同時に描き始める。

「… できたーーー！」

結果。

妹……カラフルなマルに手足と思われるものがくつついていた。
ママ……無難に帝国貴族のお嬢様みたいな感じだつた。
ユリアンお兄ちゃん……意外。画才がない。全然ない。人の形はしてたけど、服の形は良くわからない。

そして私。

「シャルロット…」Jの人はどんなお姫様なの？」

「Jの間図書館でかりた『本のお姫様なの、ママ。とってもきれいなドレスを着ていたの』

「シャルロット、どんな本だつたんだい？僕こんなドレス見たことなかつたよ」

「えつとね、『かぐやひめ』つて書つの。ひめだし、お姫さままでしょう？」

とつてもキレイなドレスだつたの、と言えばみんな『へー』と不思議そうに私の絵を見た。

『かぐやひめ』は実際に図書室に置いてあつたので、なんの問題もないと思つ。

ま、見つけた時はビックリしたけどね。さすがにボロボロで1冊しかないし人気のない本だから大人たちは見た事がなかつたんだろう。

「ああ、Jの服は見た事があるよ。確か西暦時代の地球の極東地域のどこの民族衣装だつたと思つんだが…。どじだつたつけな？」
「お前、よく知つてるな」

「いや、『かぐやひめ』は知りませんが戦史を調べていた時の資料の挿絵に載っていたのを覚えていたんですよ。重ね着しすぎて重そうだつてね」

情緒がないよ、ヤンおじちゃん。

でもこれで、「日本」も「十一単」も一般には全然知られてないのは良くわかった。

同盟も大したことないなあ、くたばれカイザーなくせに憧れのお姫様は帝国のお嬢様なんだから。

どうせなら対極した何かを浸透させればよかつたのに。

なんて、実は私もコリアンお兄ちゃん達が来た時にこっちの常識を色々と学んでたりするので都合が良かつたりする。

「コリアンお兄ちゃん、今度は何を描くの?」

イゼルローンで暮らし始めてしまって経つた。

暮らして始めて分かったことは、やっぱり常に戦争中なだけあって、それほど治安は良くないといつて」と。

私は8歳なわけだけど、まだ一人でお使いに行つたことはないし、買い物に行つた先でも一人で待たされるってことはない。
常にママと一緒にしたり、ユリアンお兄ちゃんがいたりするの。
でも、この日はちょっと違つた。

「じゃあシーランコップさん、申し訳ありませんがお願いいたします。シャルロット、シーランコップさんのことよく聞いて、いい子でいるのよ……妹のことももうしくね。」「ママ……」

「お任せください、キャゼルヌ夫人。なーに、少しくらい、私がだつて子守できます!」

……ママ……??

なぜにシーランコップなのか。

それはママが主婦であり女だから。

イゼルローン商店街に新しくオープンしたお店でオープン記念バーゲンをやっているのを発見したママが、偶然出会ったデートの真っ最中なのにバーゲンに参戦したくてうずうずしていたショーンコップの恋人と意気投合して、私とショーンコップを置いてバーゲンに突っ込んで行ってしまったのだ。

因みにショーンコップの恋人はとうくにバーゲン会場に突っ込んでいつたけど、ママはきちんと私と妹とショーンコップが喫茶店でチヨコレートパフェ2つとドーハーを注文したのを見届けてから出かけて行つた。

さすがママ。

ショーンコップの不良中年っぷりをよくわかってるのね!!

喫茶店のマスターとも一応知り合いなので、保険をかけているんだわ。

それについても、デートの途中にバーゲンに突っ込む恋人つて一体…。ま、早々に振られるでしょうね、どっちかが。

なんて、無責任で下世話なことを思いつつ、ちみちみチヨコレートパフェを食べ進める私。

たまに食べこぼしそうになる妹の面倒も見たりして、なんていいお姉ちゃんなんでしょうと自画自賛してみると

てかさ。

正直8歳児がローゼンリッターの隊長さんと話せる話題なんてない

わけで。

『おまえこのよねえ。

とか考へてみるとタマミングよくシルーンコラフがのほつから

「お嬢ちゃん」

と声をかけてきた。

「なあに?」

ちゅうと小さい声で答える。一応世間知りのお嬢ちゃんはなずな
ので、人見知りちくな演出だ。

「お嬢ちゃんはいへつだ?」

「… 8歳なの。シルーンコラフおじちゃんは?」

こりで注目。私は普段、オルタンスのことをママ、キャゼルヌ先輩
をパパ、コリアンをコリアンお兄ちゃん、ヤン提督はヤンおじちゃん
まと既に脳内で変換済みだけど、まだ呼び方が決まっていない人に
ついては脳内で呼ぶとき基本小説を読んでいたころの呼び名で呼んで
いる。

一応私の中で決まりがあつて、出会つて呼び方が決まつたら、脳内
でもその呼び名に変換して呼び方を統一するよつこじている。
ぼろが出ると困るし。

で、シャルロット基準でいくとシルーンコラフは『おじちゃん』で
いいはずなんだけど…

「少なくとも、お嬢ちゃんにおじちゃんと呼んで貰はれる程度ではない

なあ

と、やけにキッパリ拒絶をされた。

ま、予想の範囲内ですけど。いつも不思議なんだけど、同盟の男性陣って年を取ることにすこく抵抗があるのはなんでかな？
私わりと年上のほうが好みなんだけどなあ。男は30からっていうじゃない？

「じりして？おじりやまじやダメなの？」

「おじりやまなんて、いかにも年をくつたジジイに対する呼び方だ
るわ。何も悪いことをしていないので、なんでおじりやまなんて呼
ばれなきゃいけないんだ」

おお、どこかで誰かが言つようなセリフだなー！
ちょっと感動。

でもシャルロットにはシャルロットなりの理由があるので、じりり
もじゅっと反撃に出でみる。

「でもパパが、ヤンおじりやまより年が上な人は、全部おじりやま
つて呼びなさいって」

ショーンコラフおじりやまは、ヤンおじりやまより年が下だった？
と無邪気に一発。

因みにこの基準で行くと『お兄ちゃん』の権利があるのはコリアン
お兄ちゃんのほか、ポプランやコーネフとか辺りだ。アッテンボロー
ーくんがギリギリかな？

ショーンコップもちよつと言葉に詰まつたみたいだけビ、涙を取り直したのか

「俺は確かにヤン提督よりも年は上だが、あの人よりも体も心も若さを保つていいつもりでね。お嬢ちゃんにおじちゃんなんて呼ばれると、余計に年をくいそうでいけない。せめて『ショーンコップさん』程度にしてくれるかな?」

と、さつちり要求してきた。

ふむ。

まあ、本人の意思に沿つてあげてもいいかなって思わなくもないんだけど、私さつきから一つだけ気になつてることがあるのよねえ。

「…………シャルロットだつて『お嬢ちゃん』じゃないもん

「うん?」

「シャルロットだつて『シャルロット』だもん、『お嬢ちゃん』なんて呼ばれるお子様じやないもん。おじちゃんはシャルロットのこど、すつと『お嬢ちゃん』だつたから、シャルロットもおじちゃんのこど、すつと『ショーンコップおじちゃん』なの…」

ねー、と妹に同意を求めるが、妹もクリームのこっぴこついた口どうたアと笑しながら「ショーンコップおじちゃん」と呼んだ。

相手に名乗るときはまず自分から。

なら、相手に呼んでもらいたいときはまず自分から、でしょ?
最初つかづつと氣にくわなかつたのよ。

そのあと。

シルーン・ゴラップおじひやまは「なるほど」と笑い、それからじしまりく『お嬢ちゃん』と言わない努力を開始したけど、一晩田くらいにはすぐほろが出してしまっため、へそを曲げた（ふりをした）私からずーっと『シルーン・ゴラップおじひやま』と呼ばれ続けるよくなるのは、

まだ誰も知らない未来の話。

今日、パパが『俺不機嫌です。ものじりつ納得できません』顔をしたアッテンボローを連れてきた。

「まあ、落ち着け」

飯でも食つてろ欠食児童と、失礼な事を言いながらとりあえずご飯をすすめてる。

「…………」

でもアッテンボローも言いつけどおり黙つて食べているあたりが可愛いわよね。

あ、お気づきでしょうか私はアッテンボロー贔屓でした転生前。20も後半なのに言動が若々しく後輩チックなのがなんともたまらん。

モード入った時に年の差は私の中で大問題になりそうだな。

なんて、くだらない事考えながらボーッとアッテンボローの方を見ていたら。

「どうしたシャルロット、俺の顔になんかついてるのかい？」

アッテンボローと皿が合いました。

まさか「あなたとの恋愛関係成立はありかなしか考えてました」なんて本音を言えるはずがない。
パパ泣いちゃうかもしねないし。
無難に

「アッテンボローお兄ちゃん、怖い顔してるからビリしてかしづつて思つてたの」と答えてみた。

「ほらみろアッテンボロー、お前さんが景気の悪い顔してるからウチの娘が怯えてもんじゃないか」

さつさと顔を治せ（どう治すんだろう、整形？）と半分本気っぽくいうパパに、アッテンボローお兄ちゃんはキツとキバをむいた後、「違うんだシャルロット、君のせいじゃないよ」

と、何が違うか分からぬけどとりあえず釈明らしき説明を始めた。

「今日ね、くだらない番組名をタオルやら歯ブラシに印刷した有名人がいたんだ。でさ、俺に『恵まれない人たちにこれを配つて宣伝して來い』って言つんだぜ？」

「アッテンボローお兄ちゃんに？」

「そつ。俺はね、シャルロット、軍人であつて、営業マンじゃないんだ。その番組の事も大嫌いだし、俺の仕事じゃない事を、俺の上

司でもないのに当然のよう命に命令する有名人なんて大嫌いなんだ。

「だから、ちょっとイタズラしてやつたのさ」

「イタズラ？ どんなイタズラ？」

「配れって言われたタオルとか歯ブラシを、『番組を見る事も出来ない辺境に行く恵まれない人たち』に配つてやつたのさ！ 多分あいつらは『番組を見る事のできる恵まれない人たち』に配つてやれって言つてたんだろうけど、そこまで詳しく命令されなかつたから、裏をかいてやつたんだよ」

「どうだ凄いだろ？ と胸を張るアツテンボローお兄ちゃんに、

「恵まれない人たち、喜んでくれるといいね」

と返しつつ、私は自分の少ない銀英伝知識の中から一つのイベントを引っ張り出すことに成功した。

捕虜交換式。

「どうか、アレが近いのか…

「喜んでくれたよ。でもな、君のパパやヤン先輩は、俺の事怒つたんだぜ？ 酷いと思わないかい？」

「パパ、お兄ちゃんのこと叱つたの？」

「シャルロット、いつかお前にも『本音と建前の使い分け』が分かる時が来る。アッテンボロー、お前シャルロットと同レベルでどうするんだ、本音と建前くらい使い分けろ！」

「使い分けでます！ でも、今回は必要ないと思つたんです！」

「それが青いって言われるんだお前は！」

「俺はまだ20代だから、若くても青くてもしょうがないんですよ！」

パパもアッテンボローお兄ちゃんも、だいぶお酒がすすんでいるの
でなんか言っている事が支離滅裂になりつつある。

こういう時、「子供らしさ」を大切にするママは、子供が酔っ払い
に近づいている事をあまり良くは思っていないので、私はそっと退
散した。

「ママ、もう寝るね。おやすみなさい
「はい、おやすみなさいシャルロット。良き夢が見られるといわ
ね

ベッドにもぐりながらなんとなく考えるのは、さつき仕入れた「捕
虜交換式」が近いという情報の事。

私、あのイベント好きなんだよね～。

近くで見るには、どうしたらいこのかな…

さて、□□で残念な報告です。

実は私、頭が悪い。

といつも、成績が悪い。

まあ色々と言い訳をさせていただくと、一番の原因はやつぱりシャルロットの記憶が殆ど残っていなかつた、といつもだらば。

あ、ちょっと残つてた事が判明しました。

盲点だつたんだけどね、私文字が読めたの！

や～意外だつたわ。

とりあえずイゼルローンにも小規模ながら小学校（エレメンタリースクールと呼ばれている。アメリカ文化？）があつて、シャルロットもそこにきちんと通つていたので、

（やばい、文字が読めなかつたらどうしよう…）

とか思つていていたわけなんだけど、教科書は普通に読めた。

そういう言葉もわかつたしね！

どうやら一応最低限のコミュニケーション能力は付けていてくれたらしい。（誰がだ）

しかし、『最低限』といつも単語に注目！

シャルロットが習つてないと思われる単語の綴りとかはマジでわからないので、普通に覚えるしかありません。

「英語だつたら習つたことあるんじやないの？」と甘く見ない方がいい、□□はもう地球のことなんてポイッと捨ててしまつたほどの

未来の世界だから、言語も微妙に違っていて、下手に昔の知識がある方がわけがわからない事も多い。

ので、勉強力チ勝負となると、明らかに分が悪いんだなあ、これが。
同盟公用語 同級生と同レベル。

帝国公用語 8歳までの記憶がないため、2年間学んできた初步の課程がさっぱわからず、底辺。

数学 サスガに目覚しい発展があつたとしてもこの世代が学ぶところなんてそう変わらないので優等生。

理科 根っここの部分は同じ。だか化学はともかく科学は発展しきててお手上げ。

社会 地球の2000年までの歴史しか知らない私にとつては既に未知の世界。

ふふふ。20年以上の人生を歩んできた記憶のあるこの私が、8歳児に余裕で勝てる教科が数学しかないという現実。

しかも数学ってどっちかと言えば苦手教科なので、今はともかく長い目で見て、いずれ追いこされていくに違いないと思う。つていうか、元々文系だったので何か間違いが起きても理系にだけは進みたくない。

でもこの成績じゃ、何か将来に不安を感じるなあ。

私、将来何をしたらいいんだろう…

という素朴な悩みを抱えていたわけですが、ある日図書室に行つた時に気づいた事があつたのよね。

私、日本語読めるし、書けるじゃん…！

思えばコレって凄くない？

今はもう使われないかもしない言葉を自在に操れる私。…あ、何かカツコいい。

地球の文化、特に極東の小さな島国の日本の文化なんて、有名な事はともかくそんなに残っていないとも思つよね。そういうの掘り起こして発表するだけでも、職業として立派に成立しないかな。

と、ちょっと調べてみたら「民俗学」とか「考古学」って単語が引っ掛かってきた。

民俗学かあ。：

ま、地球の極東地域の民族、特に日本人を研究しています、とか言うのも悪くないかもねえ。

食いつぱぐれないかも…。

そんな打算から、私の将来の夢は「民俗学の研究者」になつた。

とつあえず今はその片鱗を覗かしとかないとね！

そんなわけなので、成績が悪いのは仕方がないから、過去は振り返らず今を頑張つてます。

「ママはムツターフて言つんですつて~」

「あら、 そうなの? ジヤ あパパは?」

「ファーター!」「

まずはいきなり言葉に興味を持ち始めました設定開始。

や、まずは言語に興味を持つて、同盟公用語どころか帝国公用語は通過点に過ぎず、日本語まで習得しちゃいましたって流れを作りつかと思って。

帝国公用語は、私の知つてる未来がそのまま来るとすれば必須だろうから、私も割と必死です。

やっぱ時代に乗り遅れたくないもんね？同級生の中には「敵国の言葉なんて覚えてられるか！！」とか言つたりやつてあんまり熱心じゃない子たちもいるけど、そういう子にも

「捕虜の人とか、何言つてるかわからんないと色々不安じゃない？悪口言つてたりしても嫌だし…」

と、それとなく勉強する気になるように促してはいる。同級生たちが後々後悔するかも、と思いつと寝覚めが悪いしね！

実は捕虜交換式のキルヒアイスの名ゼリフをきちんと自分で理解したいというのが今の私の野望なんです。

そのためには勉強あるのみ！という事で頑張ってるんだけど、さすが8歳、頭が柔らかいのか、覚えたい事がスルスル入っていくわ～。これはなんとなるかも知れない、と自分のことながら期待しちゃつてます。

あとは図書室に通つて、特に歴史モノとか物語をよく読む所から始めて、いざれその中で出てくる様々な文化についても興味を持ちましたつてなる寸法。

まず第一歩として。

「ママ、私今日のお昼は『たまご』はん『がいいなあ

「あら、またそれ？シャルロットはたまご飯が好きねえ

「だつて美味しいんだもの。私にも作れるし…」

そう、誰にも作れる「たまご」はん」を我が家定番にしました！ニンジャが出てくる物語にけよこいつと載つてて、そこからネット検索したら「昔の食べ物」として紹介していたんだよね。

それをおねだりしてママに材料を買つてきてもらひつて自分で作つてみたんです。

お手軽+簡単でママもビックリ。

そのあと、『卵のリゾットよ』と平然とパパに出す姿を見て、今度

は私がびっくり。

ま、汁気から言えばリゾット…か?

パパもユリアンお兄ちゃんもヤンおじちゃんも、おかわりするくらい好評でした。

今度は何を作りうかな~?

『シャルロット・フライリス・キャゼルヌです。8歳です。好きなのは、ママとお料理することと、妹とユリアンお兄ちゃんと遊ぶ事です。嫌いなことは、運動と、お酒を飲んだパパのお世話です』

『はい、シャルロット良くなりました!』

ふふふ。柔らかい8歳の頭脳と、大人ならではの効率化を知つてゐる今の私には、帝国公用語も怖くはないわ……！

つて、まだ片言自己紹介レベルなんすけど。

なんといふか、キルヒアイスの話を自分で理解するとか無理じゃね?

もう既に同盟が捕虜にした皆さんは到着しているらしいので、キルヒアイスが来るのもそんなに遠い話じゃないと思つのよねえ。

とりあえず、今日の授業は『帝国公用語でフリートーク』なので、私は先生に直接聞いてみる事にした。

『先生、私は聞きました。もうすぐ、帝国の人が来る。それはいつ?』

……片言のはじょうがないのよ、分かんないんだもん!!

『シャルロット、正しくはこうです。『先生、私はもうすぐ帝国の人たちがここに来ると聞きました。それはいつですか?』……さ、復唱して『いらっしゃい』』

『……先生、私はもうすぐ帝国の人たちがここに来ると聞きました。それはいつですか?』

『よろしい。』2月19日です。その日は学校はお休みです。家で国営放送を見て、後で感想を教えてくださいね』

『分かりました』

そつかー、もう2月に入ってるから、ホントにすぐそこなんじゃない。やっぱ、この語学力じゃまだネイティブの会話を理解するのは難しいかしら、とか考えてると他の子たちも先生に質問し始めた。

『先生、帝国からはどんな人が来るんですか?』

『いけない人ですか?』

『私たちは戦いますか?』

……やけに物騒だ。

言い方は丁寧だけど、それは帝国公用語に慣れてないからで、要するに「悪いやつらが来るんですか?」、「俺たちが叩きのめしてやりましようか?」という意味に違いない。

や、あんたたちじゃ小指一本も折れないし。

がら

『帝国から来る人は、戦いに来るのではありません。本当は同盟にいるべき人と、本当は帝国にいるべき人を交換して、お互に幸せになりますよと言つてくれた人が来ます。名前はジークフリード・キルヒアイスさんです。とってもハンサムな方だそうですよ』と話した。

『へー、帝国にいる、いいひとなんですね』

『見てみたいです』

『私も!』

子供つて単純で、先生がいい印象を話すと「いい人」、悪い印象を

話すと「悪い人」にすぐ断定してしまう。

【おーる・おあ・なつしんぐ】の精神よね。

今現在私のクラスのキルヒアイス評価はウナギ登りだ。

「いいですか、みなさん。先生は一言も『いいひと』とは言つていませんよ」

先生は伝わらないと感じたのか、同盟公用語で話しました。

「今回、キルヒアイスさんが私たちにとつても嬉しい行動を起こしてくれたのは、その行動をとる事で帝国側にも嬉しい事が起ころるからです。

決して全て同盟のためを思つてしてくれたわけではありません。今回はどちらも嬉しい結果に繋がったわけだけれども、今度出会う時はそうではないでしょう。

同盟と帝国の間には戦争を続けなければならない大きな理由があつて、それはまだ解決していませんから。

私たちにとつて帝国の人は、「いい人」と言いきることはできない人たちです。

みなさん、何か一つの事で軽々しく人を「いい人、悪い人」と判断してはいけません。

：でも、帝国の人だつて、「自分たちにとつても嬉しい事」なら今回のように「私たちにとつて嬉しい事」をしてくれる人がいて、キルヒアイスさんはその一人です。

帝国の人たちを、軽々しく「いい人、悪い人」と判断してはいけないけど、だからと言つてどちらか一方に決めつけることはしないで、自分の目で見て、良く考えてから判断しましょうね

「「「「はーい」」」

8歳児にはちよつと難しいのか、クラスメートはあまり理解できなかつたような顔をしながら返事を返した。

しかし先生、やけに良識的な事を言つ。やつぱ、ヤンおじちゃん率いるイレギューラーズが跋扈するこのイゼルローンだと、リベラルな発想の人が多く集まりやすくなるのかしら。

『先生、私たちはキルヒアイスさんに会えますか?』

ハンサム、と聞いたからか、ちょっとおませそんな女の子がそう質問してきた。

『いいえ、たぶんあなた方は会つ事ができません。テレビで見るとよいでしょう』

『でも、不満です。テレビは早い。話すのが。聞こえない』
『メイリン、『聞こえない』ではなく『聞き取れない』です。『丈夫、みんなはもう、帝国の方とお話しできるくらい上手に話せます。19日はテレビで誰がどんな事を話したか、先生に教えてくださいね』』

『帝国の方とお話しできる』…?

知らないうちにそこまで語学力が進んでいたのか。
ちよつとびっくり。

転生する前だつて学校で英語は習つていたけど、実際にネイティブな人と会話するほどうまくはならなかつたもん。

アレか、やつぱり必死さか。

まあ、帝国公用語と同盟公用語が割と似たような形態だというのも覚えやすい理由の一つではあるんだけどね。

でも、そつかー……話せるのかー……

「？』『シャルロットイリしました、凄く機嫌がいいようですね？』『

『はい先生、私楽しみです。凄く。19日です』

『そう。じゃあしつかり言葉を練習して、テレビをもつと楽しめる
ようにしなくてわね』

『はい！』

思わずニヤニヤしてしまったのが先生にも伝わってしまったが、まあそれは仕方がない。

今、この段階で私の目標が

「キルヒアイスの言つている事を理解する」

から、

「キルヒアイスとお話しする」

に、大幅バージョンアップを果たしたんだから！

「パパ、ヤンおじちやま、コリアンお兄ちりやま、お願ひします！」

「お願ひしますと言われてもなあ……」

「うへへん……」

「…………」

私が頭を下げて頼んでいるといつに、男どもは唸つてばかりで色よい返事をくれやしない。

まあ、なかなか難しいお願ひをしている訳だけれども。

「今度ね、どうじてもパパの職場に行ってみたいの、学校の宿題な
の、【職場体験】なの」

今のシャルロットのカワイイラシイ姿を活かしてウルウル上目使い
作戦を決行中です。

ポイントは胸の前で手を合わせて【お願いポーズ】を作るといふ。
この位の子供特有のあどけなさを醸し出すカンジで狙い撃ちたいと
ころだ。

… 可愛いだろうな私

シャルロットだけじゃ

自分でもたまに鏡見て「外国人の女の子可愛い！」と萌えてるのは
内緒の話。

傍から見たらナルシストだもんね。

「シャルロット、パパは確かに事務の仕事だけど、それでも軍人に
は違いないんだ。危ないから、できたら他の仕事にしなさい」

「クラスメートの中で、一緒にやつてもいいよと黙っててくれる子はないのかい？」

「パパとヤンおじちゃんはそう言ってなんとか断り切っている。で・も・ね。

「でも、クラスの子の半分以上がパパかママは軍で働いてるんだもん」

「…………ああ、なるほど」

2人とも甘いのよ。

「ここはイゼルローン【要塞】で、軍の施設で、そりやこんだけ大きいから商店だつてあるし町一個分の人数以上の人が余裕で暮らせるほど人はいるけどさ。

それでも大部分は軍の関係者よ。

しかも、

「リューくんのパパはローゼンリッターだし、セイラちゃんのパパはちょうど部なんだつて。カンナちゃんのママはパパと同じ所だし…」

大抵パパよりもっと危険な部署か、当然行っちゃいけない部署か、パパと同じならパパの部下で、

要するに軍内で職場体験をするなら一番無難なのはパパの所なんだよね。

「シャルロット、他の職場に誰かと一緒にいくのでは駄目なの? シャルロットはケーキ屋さんとか、大好きじゃないか」

なんとなく困つていそうなパパとヤンおじいちゃんを見かねて、ユリアンお兄ちゃんが助け船を出してきたけど、私は今日は乗るつもりはない。

「ケーキ屋さんは、セイラちゃんところーくんが行きなさいって先生が言つたの。それに、カンナちゃんはママの職場に行くんですつて！ カンナちゃんのママはパパと同じ所なんだから、シャルロットだつて行きたいの」

「そう。私は今回は何としても【同盟軍】に入り込みたかった。やーほら、もうすぐキルヒアイス来るしね？ なんとか繋ぎを作つときたいじゃないですか。

「シャルロット、パパの職場は確かにカンナちゃんのママと同じ所だ。だが、パパの仕事は軍人以外には見せられない書類がカンナちゃんのママより沢山ある。シャルロットがもし来ても、多分つまらないし、がっかりすると思つよ。できれば違う所にしなさい」

「…でも」

「やうだ、ママの仕事はどうだ？ シャルロットは将来ユリアンのお嫁さんになるんだから、ママの仕事をしっかり体験してみるのもきっと勉強になるわ。シャルロットが夕飯を作ってくれたりしたら、パパは嬉し

「ママの仕事は知つてるもん…！」

「ママのお仕事は知つてるもん！ きちんとまだできないけど、少しづつ手伝つてるもん、毎日見れるもん！ でも、シャルロットはパパのお仕事は見たことないよ？」

パパはいつも、どんなお顔でお仕事してるの？

パパはいつも、職場でどんなお話をしてるの？

パパのお仕事のお友達はどんな人なの？

パパはどんなお仕事は好きで、どんなお仕事はキレイなの？

ママのお仕事は見てたけど、パパのお仕事は知らないもん…」

シャルロットは、無知だ。

こんな戦争の最前線の要塞にいながら、それでも軍の、戦争の情報は必要最低限しか与えられないし、なるたけ危険なところから遠ざけられて【守られて】いる。

ま、ありがたいっちゃありがたいんだけど、私は一応中身オトナでしたから、シャルロットをそんな【金庫入り娘】にするつもりは毛頭ないのよ。

危険すぎる事は「ermenだけ」、自分が危険などといひて、守られているんだって言つ事を忘れない程度には確認することやらぶさかでないんです。

だから今日は引かないつもり。

……ま、妥協点は用意してあるんだけどね。

「…………」

「……アーン、困ったねえ」

黙ってしまったパパと、うつむいたまま動かない私を見て、ヤンおじちゃんはガシガシと頭を搔いた。

「シャルロットが言つている事も、分からぬではない…。先輩、提案があるんですけど」

「……なんだ」

「シャルロットの職場体験、ユリアンにお願いしたらどうでしょう。」

彼が今やっている事といえば、そんなに危険な事ではないですし、その日はメッセンジャーを中心に動いてもらうことにして先輩の所に行つたり【先輩のお友達】の所に行けばいいじゃないですか

「しかしだな……」

渋っているパパに、まだうつむいている私。コリアンお兄ちゃんは少しオロオロしていて口を挟めない。

そんな中、キッチンからお茶とクッキーを持ってきながらママがついでのようにポロッと言った。

「あら、ヤンさんがいらっしゃっているんだからそれでいいじゃありますか」

「オルタンス！」

「あなた何をグズグズしているんです、せっかくヤンさんが良い案を提供してくださったんですよ、それでいいじゃありませんか」

「しかしだな、俺はもし戦闘に入つたりした場合の事を考えて……」

「まあ！あちらから言つてきた捕虜交換が行われるはずのこの時期に、イゼルローンを直接攻撃なんてそれこそ帝国が恥知らずでない限りあり得ないってことくらい、素人の私にだつて分かりますよ。それに……ねえユリアン」

「つ、はい！」

「もし職場体験中に戦闘態勢に入つたら、シャルロットを家まで届けてくれるわよね？ヤン提督も、それでいいですわよね？」

「はい！」

「もちろんです、キャザルヌ夫人」

ほら、何か問題でもありますか？と続けるママに、パパはぐづの音も出ない。

「つ、勝手にしろー！」

「やつれせてもらこますとも。…ほらシャルロッタ、あなたも顔をあげなれ。いつまでじょげているの」

ママに肩を押されて、私はおずおずと顔を上げる。

「…パパ」

ほんとにいいの、小さな声でたずねると、パパは

「氣をつけるんだぞ」

とまだ少しすねた声でしゃう、答えた……。

勝ったね!!

実は本命は【コリアンお兄ちゃんの職場体験】でした!!

いやさ、だつてさ、パパの職場無理。私一円中椅子に座つてられそうもないし。

多分あの人自分の部屋からあんまり動かないと思うんだよね。

マジな話極秘文章とかも多いだろうじ、実は最初から狙つてませんでした。

でも、最初から【コリアンお兄ちゃんの職場体験】をお願いしても

やつぱりひと悶着あると思うのよねえ、パパ、あんまりシャルロットを戦争と闘わせたくないみたいだし。

そこで！一計を案じた私はまず無理そうな事を要求して、相手の方を見ながら自分の本命を勝ち取るという取引のワザを使おうとしていたんだけど……。

ママが援護射撃してくれるとは思わなかつたわ。

かなり助かりましたー。やー良かつた良かつた大成功！

嬉しくて思わず「！」ながら

「ありがとう！パパ、ママ、ヤンおじちゃん、コリアンお兄ちゃん！」

と言つた。やつぱお礼は基本でしょ。

「良かつたね、シャルロット。頑張るつね」

「はい、コリアンお兄ちゃん。よろしくお願ひします！」

「おはようございます、今日はお願いします、コリアンお兄ちゃん
が」

「おはようシャルロット。今日一日頑張りな

私は早速、課題消化のために職場体験をすることになった。
てか、ぶつけやけ捕虜交換式が近すぎて、そのあとはコリアンお兄
ちゃんもヤンおじちゃんもハイネセンへ旅立つので、かなり無理を
して調節してくれた、らしい。

子供の私には裏事情は話してくれないんだけどね。

ともあれ、コリアンお兄ちゃんは朝早く我が家に寄つて、私を回収
してくれたあとヤンおじちゃんのオフィスに出勤することにしてく
れたので、私はやっぱり何にも準備する事はなかつた。

いるのはペンとメモ用紙、お昼用のお金（食堂で食べぬきっこ）と
女の子だからティッシュとハンカチかな、とヤンおじちゃんは呑氣
に言つてたけど、私はそれに一応カメラをプラスしておいた。許
可が降りたら撮影してレポートにまとめないと、見栄えも悪いだろ
うしね。

「おねえちゃん、いらっしゃい」

「コリアンにあまり無理を言わなこよひにね

「はい。いつきますー！」

妹とママに見送られながら、コリアンお兄ちゃんが歩きだす。

「お兄ちゃん、今日は何のお仕事をするの？」

「うーん、ヤン提督は『主にメッセンジャーをしたらいい』と言つ
ていたから、色々な書類を持って誰かのオフィスに行くのが主な仕

事になるかなあ。あとは、ヤン提督が仕事をしやすいうつり周りの環境を整えるのが、僕の主な仕事なんだよ」

「周りの環境を整える?」

「ちょっと口寂しくなった時にすぐ紅茶を入れたりとか、頭の動きを鈍らせないよう日に甘いものを用意しておくとか、書類をなくさないように整理整頓しておくとか、だね」

「つーはー、書けました」

歩きながらだけど、結構いろいろな情報があつたのでメモを取るのも一苦労だ。そんな様子の私を見て、「なんだか新聞記者みたいだね」とお兄ちゃんは笑った。

「じゃ、今日はムライ少将とキャゼルヌ少将にこの書類を届けてくれないか」

「はー、わかりました」

「はー、わかりました!」

ヨリアンお兄ちゃんに続いて元気よく返事する私に、ヤンお兄ちゃんまとフレデリカお姉ちゃんは「コニコニ」と笑って「頑張ってね、シャルロット」と応援してくれる。

頑張りますよー、やる気マンマンだもん!ー

「行く前に何か質問はあるかい、シャルロット」

ヤンお兄ちゃんも気をきかせてこんな事を言つてくれたので、私はかねてからの疑問を消化することにした。

「あのね、何で端末でメールができるのに、メッセンジャーが必要なの…ですか?」

これ、割とわかんなかったんだよね。メールで済ませりゃいいじゃんつて常々思つてたのよ。

ヤンお兄ちゃんは「いい質問だ」と言つていつも説明してくれた。

「メールは確かに便利だね。いつでも好きな時にチェックできる。でもそこが一長一短で、…ああまり弱点もあるんだ。返事が欲しい時間までに相手がメールをチャックしてくれていなかつたら、困るだらう?だから、返事がきちんと欲しくて、人を介しても大丈夫な場合はメッセージジャーを使うんだよ」

なるほど。

ま、機械だとハッキングの心配とかもあるんだろうけど、大まかにはそういう理由があるのね。
確かにショーンコップおじちゃんとかポップランとか、メールチャックしなさそうだもんなあ…。
メモを取りながらそんな事を思つ。

「こんなんいいかな?」

「…はい、ありがとうございました」

ヤンおじちゃんにお礼を言つと「それなら行こうが」とココアンお兄ちゃんが声を掛けてくれたので、早速出かけることにする。
「行つてきます」と手を振りながら挨拶したら、フレデリカおねえちゃんも「ゴーゴーしながら手を振り返してくれたし、ヤンおじちゃんは片手あげて「気をつけろんだぞ」と送りだしてくれた。

「じゃ、まずはムライ少将の所に行こうか」

「はい。…ムライおじちゃんはどうこにいるの?」

「今のは時間なうん自分のオフィスだと思つよ」

コリアンお兄ちゃんはなんとはなしにわざわざ答えてくれたけど、

「コリアンお兄ちゃん、すうまい!」

と、感心してしまつた。

「え?何が?」

「だつて誰がビリにこむのか、大体わかつてゐんでしょう」「こ
ね」

「ああ……うん、それが僕の仕事だから、かな」

当たり前のじだよ、とコリアンお兄ちやまはやうつと言つたけど、
ねえ。

だいたいお兄ちやまはまだ中学生なのよね、日本で言えば。あれ高
1だつけ?

ともかく、そんな若さで秘書めいた仕事をこなせるのはやつぱり凄
いと思うのよ。

うーん、読者として読んでいた時にも『できた子供』だなあと思つ
ていたけど、いひして一緒に過ごしてみると一段とコリアンお兄ち
やまの『できた子供つぱり』を思い知らされたといつか。

私中身20代なのに、シャルロットが14・5歳になつてもこんな
風に立ち回る自信、ないわー…

とか、感心したり落ち込んだりしながらマイのおじりやまのオフ
イスに辿り着いてしまつた。

「失礼します」

「失礼します」

軍の作法なんてわからないから、大抵の事はコリアンお兄ちやまの
言動を真似ている。

「入りました」

マイのおじりやまは独特のかたい声と口調で許可を出した。

うーん、緊張する。

「ヤン提督から書類を預かつてまいました」

「つむ、いかへ寄こしてくれたまえ」

コリアンお兄ちゃんも、いつもより気を使つた話し方で対応している。

「マライのおじちゃんは、トマトがいいんだよね。」

「ごくたまに家にご飯を食べに来る事があるんだけど、その時も若干寬いではいるけど最低限の節度は保つているように見えるし。まあ、私は割と甘やかされている気はするんだけど。」

「書類は確かに受け取つた。ヤン提督にはあとで私の方から直接お返事いたしますとお伝えしてくれ」

「承りました」

「うむ。……とにかく、シャルロット君は、今日が職場体験なのだね？」

「はい、コリアンお兄ちゃんについて、お兄ちゃんのお仕事を体験させていただいています。…マライのおじちゃんも、いきょうりようありがとうございました」

いきなり水を向けられて驚いたけれど、無難な返事をしたつもりだつた。

でも、おじちゃんは少し間をおいて「シャルロット君、一つだけ注意をしておくが」と切り出した。

「今日は職場体験で、君はいわゆる『軍人の生活』を体験している。普段はもちろん、軍人の慣習にとらわれる必要はない。けれども今日は君は『軍人と同じ行動』をしなければいけない、そうだね？」

「…はい、そうです」

「うん、君も、いつもは使わない敬語を使つてしたり、それなりに気を使つて頑張つていると思う。けれど軍人にはもう一つ大切な事があるんだよ。…いつもの呼び方ではないね」

「呼び方、ですか」

「そう、呼び方だ。例えば私の事は『マライ少将』と呼ぶのが正し

い

「ムライ少将…」

「やう、少なくとも職場体験の間はそうしたまえ。公私の区別をつけるのが、正しい職業人のあり方だと私は思つのでね。… そうだな、例えば君のお父上のキャゼルヌ少将とヤン提督なんかもそうだらう。ヤン提督は普段、キャゼルヌ少将の事を『先輩』と呼ぶが、仕事の時は『少将』と呼称を変えている。… 気づいたかね？」

そういうふうだ、今田もヤンおじちゃんは「キャゼルヌ少将」と呼んでいたと思いだし、私はこくんとうなずいた。

「わかりました。」助言ありがとうございます、ムライ少将

「つむ」

満足そうに頷くムライ少将を見てから、コリアンお兄ちゃんも「ありがとうございます」と心配そうに声をかけてくれたけど、

「ううん、大丈夫ちゃんとわかったの」

「偉かつたね、シャルロット」
ムライ少将のはなし、少し難しかつたうつへとコリアンお兄ちゃんが心配そうに声をかけてくれたけど、
「ううん、大丈夫ちゃんとわかったの」と、私はこり笑つて返した。

「みんな、お家に来てご飯食べる時と職場では、やっぱり違うってことがわかつたの。ムライのおじちゃん…ムライ少将に教えてもらつて良かった。パパの所に行って、『キャゼルヌ少将』って言つたら、きっとパパビッククリするね！」

なんだか楽しみ、と続けるとコリアンお兄ちゃんも笑つて、「そうだね、どんな顔するんだろう」と言つてくれる。

… てか、コリアンお兄ちゃんはなんて呼べばいいんですか？・ムライ

少將
…！

「あ、シャルロット、ちゅうとこじ見てこいつが」

移動の最中、コリアンお兄ちゃんはそう言って私を港へ誘つた。

「ここの頃は一日に一度はこいつして港に来ているんだよ。外回りから帰ると、なんとなく提督も港の様子を気になさつていてるが多いしね」

それに僕も気になっているんだ、野次馬根性つて凄いよねなんて言いながら、出入りしている船を眺めている。

そんな時背後から

「よー、コリアン。データか？」

と、ビックリした呑氣で陽気な声がかかつた。

「ポプラン少佐！」

お兄ちゃんは振り向いて敬礼した後、「違いますよ」と返す。

「今日はシャルロットの職場訓練で、今はメッシエンジャーの仕事をしている最中にちょっと寄り道してたんです。…ポプラン少佐こそ、どうしてここへ？」

「あー、こんな時は俺たちの出番なんてそういうからな。入港してきた船の中に俺の彼女になる予定の女がいるかもしれないから出迎えに来たんだ」

「…………ああ、なるほど」

コリアンお兄ちゃんは流石にまだまだポプランの扱いに慣れてないと見えてなんとなくしどろもどろだ。

やつぱり、まだまだ子供なんだなあとがボートと考えていると「しかし流石にキヤゼルヌ家のシャルロット嬢じゃあ、ちょっと守備範囲外かな？いや、差別する気は全くないが、いかんせん俺にもいくら可愛くても少女を愛する趣味はないんでね」

と、軽口をたたいた後

「ここにちは、シャルロット」と挨拶してきた。

「ここにちは、ポプラン少佐」

さつき習つたばかりの『軍人らしいあいさつ』をすると、ポプランは（うん？）と不思議そうに片方の眉毛を擧げる。

「ああ、さつきムライ少将の所へ訪室した時に、『公私の区別は付けること』と教えていただいたばかりなんですよ。…ね、シャルロット」

「はい！」

元気よく返事をしたら、ポプラン少佐はまるで苦虫を噉み潰したような顔をして「あの生きた化石に…」とつぶやいた。

「そりや災難だつたなシャルロット。あの生きた化石と書いてムライ少将と読むべき御仁は、正しい事を言うが正しい事しか言わない。そんなの遊びたい盛りの子供にとっちゃ葬式に参加するくらいまんないだろ？わかる、わかるぞその気もち。なんたって俺は永遠の青少年だからな！」

「ポプラン少佐……教育上良くないですよ……」

なんかユリアンお兄ちゃん疲れてる。

まあ確かにポプランは子供の教育上良くないわよね。面白いけど。良かつたー私、中身大人で。なんかこの中に囮まれてたらどんな子供が出来上がるのかちょっと末恐ろしいわね……。

ユリアンお兄ちゃんみたいに聞きわけのいい子ならいいけど、なんとなく色んな人の悪影響だけモロに受けるととんでもない変人に成長しそうだし。

なんて失礼な事を考えつつ、私は割と重要な『ある質問』をすることにした。

「ポプラン少佐は、普段のときは『ポプランお兄ちゃん』でいいの

…ですか？」

「うん？なんだシャルロット」

「えと、今は『ポプラン少佐』だけど、普段はどう呼べばいいのかなって。『ポプランお兄ちゃん』でいいですか？」

そう。ポプランはまだちゃんと呼び方考えた事がないのだ。
家に遊びに来た事がないわけじゃないけど、今みたく割と下世話な
話も悪気なく盛り込む人だから、なんとなく周囲がシャルロットや
妹から遠ざけているよね。

てなわけで本人に直接確認。

ポプランはシーハーイオジヒヤまと似ているのかなって思った
けど、意外とシャルロットに対しではきちんと対応してくれてるの
ではじめから「お兄ちゃん」呼びだ。
ま、ヤンおじひやまよつ年下だしね！

「ああ、『ポプランお兄ちゃん』ねえ。いいな、どいか倒錯的で！
うん、今も『お兄ちゃん』でいいぞ」

と、ポプランお兄ちゃんはそれで良いとのことだから、これからは
ポプランお兄ちゃんに統一で決まり。

しかし。

「はい、じゃあ普段は『ポプランお兄ちゃん』にします。…でも、
いまは『ポプラン少佐』です」

と、断りを入れておく。案の定ポプランお兄ちゃんからは
「俺は別に気にしないぞ？俺がバイロットでなかつた事なんて一瞬
たりともないからな。俺はいつでもかっこよくて、強くて優しいヒ
ースパイロットさ！」

なんて返ってきたけど、フルフルと首を横に振った。

「ううん。違うの、私が間違えちゃうの。ムライ少将の言つてるこ

と、す「ぐよくわかつたから。お家に来てる時と、お仕事してる時と、みんな少し違うから、それを私が忘れちゃいけないの。ポプラン少佐は呼び方が同じでも混乱しないのかもしねいけど、私がこんながらがっしゃうかり

だからポプラン少佐でいいですか、とにかく、ポプランお兄ちやまはニヤリと笑つた。

「ふーん…なるほど。 - - イイ子だシャルロット、その年で自分の意見をキツチリ言えるなんてそういうことができるじやない。お兄ちゃんがご褒美をあげよ」

と、手渡してきたのはチョコレートボンボンだった。

「少佐、シャルロットにはまだ無理ですよ…」

中身お酒じやないですか、とゴリアンお兄ちやまは言つたけど、ポプランお兄ちやまはどこ吹く風だ。

「せうか？外側だけ舐めればいいじゃないか。 - - いいかシャル

ロット、俺が酒をおじりたくなるくらいイイ女になるんだぞ」

そう言つてガシガシと頭を撫で回した後、満足したのか「じゃあなー」と皿口結して去つていってしまった。

「なんだつたんだ…」

ゴリアンお兄ちやまがぽつりと一言つぶやいたのがちょっと笑えた。

「ねえ、ゴリアンお兄ちやま
「うん?なんだいシャルロット」
チョコレートボンボンを手渡しながら(ビビう考えたつて私じや持て余すもの)、私はゴリアンお兄ちやまにわざから気になつていていた事を聞いてみる。

「ゴリアンお兄ちやまはなんて呼べばいいの、ですか?みんなが『ゴリアンくん』だつたり『ゴリアン』だつたりするから、よく分か

らないの

すると、コリアンお兄ちゃんは（ああ、なるほど）といつ顔をした後、ちょっと考えてこう言った。

「僕は兵長待遇なんだけど、一番下っ端だから確かに職位で呼ばれる事なんて殆どないんだよね。ん~、分かんないな。多分、「ミンツ兵長」とかのかもしないけど、大体軍属でもないわけだし。……シャルロットが気にならないなら、僕だけはいつもの通りに『ユリアンお兄ちゃん』の方がありがたいんだけど、シャルロットはどう思ひう..」

確かに、職位が下過ぎて呼び捨てだつたりする事が多いのは納得で
きる。

そんな人の周りでわざわざ「ミンツ兵長」とか呼ばれるのは恥ずか
しいかもね。佐官とかになればまだいいのかもしないけど。

「分かりました。お兄ちゃんだけはお兄ちゃんにします」

「うん、そうしてくれると助かるよ」

そんなやり取りをしながら歩きはじめていたんだけど、途中でまた
ユリアンお兄ちゃんが足を止めて

「シャルロット、あれを見てごらん」

と、壁の隅に書かれた落書きを指差した。

「えっと…『くたばってしまえ、ホルト中尉、いづれ背中から撃
たれておだぶつだ、大神オーディンはお前の罪を存じだぞ…』

帝国の軍人さんが書いたのかしら」

「うん、そうだよ。帝国では家具職人をしてただけど、戦争で捕
虜になっちゃってね。でも、今回の捕虜交換式で家に帰れるつて喜
んでたんだ」

「へえ！お兄ちゃんはこの落書きの人には会ったのねー..」

「うん、偶然なんだけどね」

と、お兄ちゃんは簡単に、『こいつ』であった帝国軍の軍人さんとの話を話してくれた。

「僕と同じくらいの息子さんがいる人でね、僕が『できるなら軍人にしないでくださいね』と言つたら、『うん、うちの息子とお前さんが戦場で殺しあつたりするのは、いい気分じゃないな』て返事してくれたんだ」

と、少し嬉しそうに話し、

「ねえシャルロット、僕は軍人で、戦いに出たら勝利を勝ち取らなきゃいけないのは当然の話だ。でも、当たり前だけど帝国軍の人一人ひとりにも、娘さんや息子さん、奥さんとか家族がいて、それぞれに大切な生活があるんだなあって、僕はこの人に会つて改めてそう感じたんだよ。ぼくらは戦わなきゃいけないんだろうけど、そういう事を心の片隅でいつも覚えていた上で、じゃないといけないのかなあと、この頃は思うんだ」

「…そうね、お兄ちゃん。シャルロットも忘れないね」

「うん、覚えていてくれればうれしいな」

どうやら、お兄ちゃんはこの落書きを私に見せたかったらしい。一通り話して満足したみたいで、「そろそろ行こうつか」と歩みを速めた。

私はもう一度、落書きを振り返つてから、お兄ちゃんのあとを追つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1530v/>

銀河の歴史は何ページだったっけ？（仮）

2011年8月21日10時33分発行